

# ペルーの政治変動

——フジモリ現象への一接近——

おそ の い しげ お  
遅 野 井 茂 雄

はじめに

- I 急速な社会変動
  - II 1980年代の大衆民主主義
  - III 政党政治への不信
  - IV バルガス・リョサの登場と失速
  - V フジモリ現象
- 結びにかえて——政党政治の危機——

はじめに

ペルーの1990年大統領選挙は、最有力候補と見られたノーベル文学賞候補作家マリオ・バルガス・リョサ (Mario Vargas Llosa) が敗退し、日系2世のアルベルト・フジモリ (Alberto Fujimori) 前国立農科大学学長が当選するという全く予想外の結果となった。

フジモリは、1990年4月8日の1次選の約2週間前から頭角を現わし始め、リョサと競うと見られていた他の主要候補者を支持率で追い上げ、1次選でリョサに肉薄する2位につただけでなく、2次選ではリョサ陣営を除くほぼ全勢力の支持を受けて当選した。まさに内外で「フジモリ現象」、「ツナミ (津波) 現象」と呼ばれ注目された所以である。

世界選挙史上おそらく例を見ないであろう政治家としては無名候補者のかくも短期間での支持率の急伸振りについては、投票行動に関する地域別・階層別の総合的分析が必要となろう。とくに貧しいアンデス高地で、フジモリはインカの再来と言われた。

『アジア経済』XXXII-9 (1991.9)

また同大統領選挙は、とくに2次選において、フジモリの日系人としての出自、プロテスタント勢力と貧困層をバックにしたその選挙活動ゆえに、人種、宗教、階級など「ペルー問題」の根幹を成す要素の激しい対立 (それによる「社会の分極化」) を惹起する結果となり、ペルー現代史解釈へのきわめて興味深い示唆を含んでいると言わざるをえず、その面からの考察も加えられねばならないであろう。

本稿は、「フジモリ現象」の予備的考察として、フジモリの勝利は、(1)近年ペルーをおおう急激な社会変動がもたらしたひとつの政治的帰結と見ることができる、(2)とくに、そうした政治社会変動を既存の政党政治が吸収しえなかったことによる、との仮説をマクロの観点から論ずるものである(注1)。

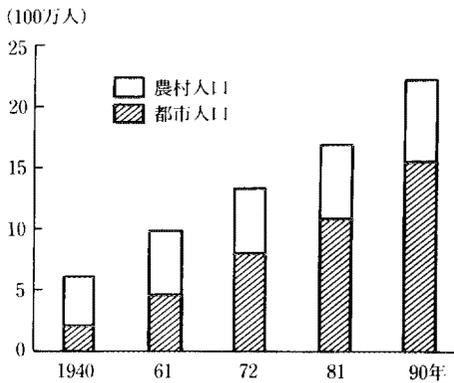
(注1) 本稿は、筆者が在ペルー日本国大使館在勤中に得た個人的経験に基づくものである。貴重な機会を与えていただいた外務省に記して感謝したい。もとより、文中の見解、誤りはすべて筆者個人に帰すものである。

## I 急速な社会変動

### 1. アンデス農民による都市の「征服」

1950年代以降のペルーの社会変動はラテンアメリカ諸国のなかでも劇的である。端的には、アンデス高地から海岸部都市 (とくにリマ首都圏) への大規模な農村人口の移動が生じ、都市人口が短期

第1図 都市化の推移（1940～90年）



(出所) Instituto Nacional de Estadística e Informática, *Perú: compendio estadístico 1989～1990*, リマ, 1990年より筆者作成。

(注) 1990年は推定。

間で急激に増大した結果（第1図）、都市の文化的・民族の変貌と、圧倒的多数の民衆層の政治的・社会的台頭がもたらされたことによる。

農村人口の大規模な移動は、戦後の「人口爆発」、伝統的農村権力構造の維持による土地への圧力の増大、教育・マスコミュニケーションの普及、都市を中心とする輸入代替工業化政策の推進、商品経済の浸透、都市優位の政治（ポピュリズム）の確立、都市消費者向けの食糧価格政策（食料輸入の増大）、通貨の対ドル過大評価策による都市消費の拡大、伝統的農業部門の停滞、都市西欧文化への期待感の増大などの結果によるものである<sup>(注1)</sup>。

都市へ大量に流入した貧しいアンデス農民は、本来ならば都市工業化過程のなかで低廉な労働力供給の源（いわゆる「低廉なチョロ」[cholo barato]）となるはずであり、文化的にも海岸部で支配的な西欧近代文化（クリオーリョ [criollo] 文化）に吸収されるはずであった。しかし工業化の雇用吸収力はきわめて限界的で（工業化なき都市化）、そのうえ1975年以降の輸入代替工業化の行き詰まりと長

期にわたる経済危機の進行の結果、不完全雇用者の大規模な群れと圧倒的規模のインフォーマル経済が形成されることとなり、アンデス農民による都市の「征服」といった現象が顕著となった。今日リマ首都圏の経済活動人口の約60%を占める農村出身者は、その多くが出身共同体特有の相互扶助や組織構造に依拠しながら、生存を賭けた、独自のルールに基づく経済活動、いわば「自己雇用」の空間を拡大し、クリオーリョ的空間をおおに至ったのである。文化的には、アンデス出身者は都市に出た代償としてアンデス的なもののある部分を失い、クリオーリョ的なものとの混交による新しい文化（チチャ [chicha]、チョロ [cholo]）が顕著となった<sup>(注2)</sup>。

まさに歴史家ホルヘ・バサドレが「20世紀初頭の社会革命」と呼び、人類学者マトス・マルが「民衆の氾濫」(desborde popular)と表現した構造的変動である<sup>(注3)</sup>。

## 2. 社会規範の融解

上述の社会変動が形態的・量的な変動であるとするれば、1968～75年のベラスコ軍事政権の改革はそれに質的転換をもたらし、今日ペルー政治のライトモチーフを成したと言っても過言ではない。

ファン・ベラスコ (Juan Velasco) は、民族主義を掲げ米系資産の国有化政策を強力に推し進めるとともに、キューバを除くラテンアメリカで最大規模の農地改革を武力を背景に実施した。農地改革の実施にあたりベラスコは、ツパク・アマルIIの言葉を借りて、「農民よ もはやお前たちの貧しさを地主たちが食べ物にすることはない」と高らかに宣言した。その言葉に象徴されるように、ベラスコの改革は、その多くが「上からの」権力行使であったものの、既存の社会規範・価値意識に決定的な変化を及ぼした。社会学者カルロ

ス・フランコの適確な比喩を借りるならば、それまで「ペルー社会を固く閉じ込めてきた旧制度の水門が、改革によって爆破され、チョロたちは一挙に溢れ出た」のである(注4)。つまりパトロン＝クライアント関係と収奪に基づく伝統的政治的社会規範は、農民の脱農民化ともいうべき過程のなかで徐々に変質しつつはあったが、ベラスコはそうした民衆の社会活動を統制してきた規範を、改革によって打ち砕いたと言えよう。

この政治秩序の分解をさらに加速させたのは、ベラスコが旧秩序を破壊しながら、それに代わる新たな秩序構築に失敗したことである。参加型・自主管理型イデオロギーを背景に体制の支持基盤を動員政策によって組織・拡大しようとした国民動員機構(Sistema Nacional de Apoyo a la Movilización Social: SINAMOS)は、発生した自発的組織が軍指導層の意図に反して自律化してゆくとき、生き延びる余地はなかった。ベラスコの改革と動員政治は、旧秩序を破壊し、かつてなく社会の政治化を進め、民衆の政治意識を高め、無数の組織を生み出しながら、体制の制度化に失敗し、改革によって生じた政治的真空を政党の代表や国家機関の介在によって埋めるに至らなかったのである(注5)。

(注1) 遅野井茂雄「中央アンデス諸国における民主化——ペルー、ボリビア、エクアドル——」(松下洋・遅野井茂雄編『1980年代ラテンアメリカの民主化』アジア経済研究所 1986年)78～79ページ。

(注2) Matos Mar, José, *Desborde popular y crisis del Estado*, リマ, IEP, 1984年/Franco, Carlos, "Nación, estado y clases: condiciones del debate en los 80," *Socialismo y Participación*, 第29号, 1985年3月(遅野井茂雄訳「1980年代ペルーにおける開発と変革の戦略とその諸条件」アジア経済研究所 中南米総合研究プロジェクト 所内資料 No. 61-1 1986年9月)/Golte, Jürgen; Norma Adams, *Los caballos*

*de troya de los invasores: estrategias campesinas en la conquista de la gran Lima*, リマ, IEP, 1987年。

(注3) Basadre, Jorge, *Perú: problema y posibilidad*, 第2版, リマ, Banco Internacional del Perú, 389ページ/Matos Mar, 前掲書。

(注4) Franco, 前掲論文(邦訳), 19ページ。

(注5) SINAMOS を通じての制度化の失敗については、遅野井茂雄「軍政と政治発展——ペルーにおける SINAMOS と軍部——」(I)(II) (『アジア経済』第19巻第10, 11号 1978年10, 11月)。

## II 1980年代の大衆民主主義

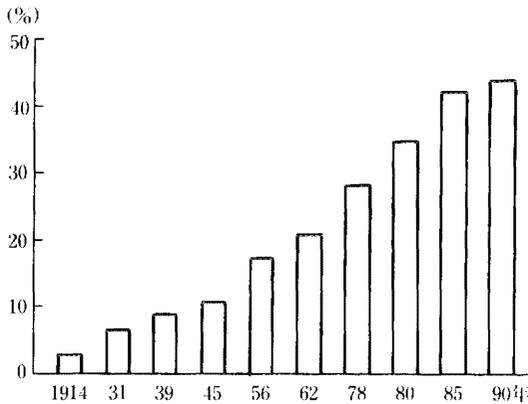
### 1. 農民から「都市の平民」へ

こうした社会変動を背景とし、また1978年憲法下での政治的民主化を介することによって、80年代には、都市を中心に民衆が政治の表舞台で台頭し、民政移管後の政治動向を左右する重要な要素となる。

1978年憲法により、有権者年齢が21歳から18歳に引き下げられ、読み書き能力の有無にかかわらずすべてのペルー人に参政権が与えられ、投票は義務づけられた。この結果、総人口に対する有権者数の割合は1962年の21%から90年には44%に(第2図)、また絶対数ではこの間に約200万人から1000万人に急増した。このなかで、農村からの人口移動と「人口爆発」の結果、1970年代の改革の世代ともいえる18歳から30歳の都市を中心とする青年層の割合が有権者数の過半数に達するに至った。まさにマス・デモクラシーの成立と言えようが、確固たる工業化の基盤を欠いたマス・デモクラシーの誕生である(注1)。

脱農民化を経てカルロス・フランコの言う「都市の平民」となった民衆は、こうした民主化に伴い著しい政治的台頭を見せるが、それは初期の間は左翼勢力の急伸となって結実した。1978年に行

第2図 ベルールの政治的民主化過程（有権者の総人口比，1914～90年）



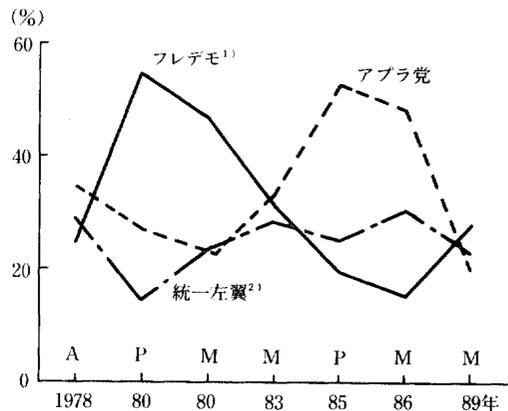
(出所) Roncagliolo, Rafael, *¿Quién ganó?: elecciones 1931~80*, リマ, DESCO, 1980年/  
*El Comercio*, 1985年3月3日より筆者作成。

(注) 1990年は全国選挙管理委員会 (Jurado Nacional de Elecciones: JNE) 発表の982万人を国家統計院 (Instituto Nacional de Estadística e Informática: INEI) の推定総人口2233万人で除したものである。

なわれた制憲議会議員選挙で、左翼勢力は全体で約30%の得票を獲得、その後80年選挙では連合に失敗し低迷するが、同年11月の地方選挙を前に統一左翼 (Izquierda Unida: IU) として連合を結成して盛り返し、以後89年の地方選挙に至るまで保守、中道、左翼と3分する政治地図における第2勢力の地歩を確立した (第3図)。とくに1983年の地方選挙において、リマ市ではバリアーダス (barriadas) を始めとする貧困層居住区で IU は圧勝し、アルフォンソ・バランテス (Alfonso Barrientes) IU 議長が市長に当選した。

首都圏での初の社会主義市長誕生を受けて、中央での左翼政権誕生はまさに時間の問題であり、ことに自由主義経済を目指したベラウンデ政権 (1980~85年)、また社会民主主義を目指したガルシア政権 (85~90年) がそれぞれ挫折したあと、それに代わるものとして90年にバランテス政権誕生が有力なシナリオと一時考えられたのも当然で

第3図 1980年代選挙動向 (政党別得票率)



(出所) JNE/Torres, Alfredo, *Perfil del Elector*, リマ, Editorial Apoyo, 1989年, 122~123ページより筆者作成。

(注) (1) A: 制憲議会議員選挙, P: 大統領選挙, M: 統一地方選挙 (全国レベル)。

(2) 1) フレデモは AP, PPC を加えたもの (1978年は AP は不参加)。

(3) 2) 1989年は、バランテス派 ASI を加えている。なお同年数値は、Apoyo 社による推定値。Expreso, 1989年11月19日。

あった<sup>(注2)</sup>。

しかし、次に見るように民衆の政治的指向を左翼と規定することはできないであろう。民衆層の多くは、かつてはオドリアの独裁、ベラスコの改革、1980年はベラウンデ、83年はバランテス、85年にはガルシアといったパターンルかつポピュリスト的指導者を支持してきたわけであり、大方は未組織で政治的には中道かつ状況に応じて動く浮動票を構成していると言える<sup>(注3)</sup>。

## 2. 政治的代表の危機ないしは政治と社会の乖離

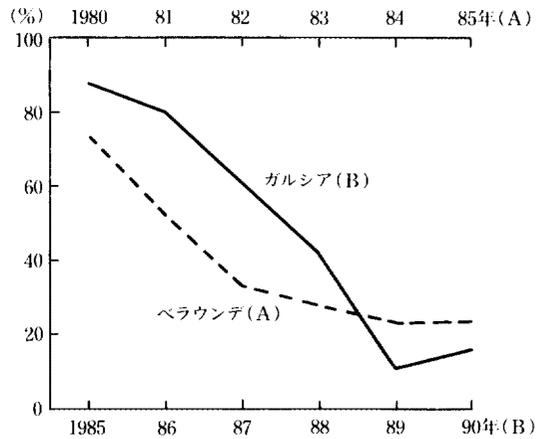
1980年代の選挙動向は、保守(人民行動党[Acción Popular: AP] およびキリスト教人民党[Partido Popular Cristiano: PPC])、中道左派(アブラ党[Partido Aprista Peruano: PAP])、左翼 (IU) に3分された (第3図)。しかし、約20%をその固定層とするアブラ党以外は、いずれも強固な組織構造を持つ

ているとは言い難く、選挙動向において浮動票が決定的な役割を果たしてきた。とくに1980年に46%の得票率を以てベラウンデを当選させたAPの例は典型的である。またアプラ党にしても1985年選挙で、若きガルシアが「すべてのペルー人との約束」をスローガンに、それまでの閉鎖的垂直的な党カラーの刷新に成功し結党以来半世紀を経て初めて政権を手中にした際も、浮動票の獲得が決め手となった。結局1980年ベラウンデに、85年ガルシアに流れた25~30%の浮動票の行方が90年選挙の鍵を握っているとも言えた。

このことを政治的代表制原理の概念から見た場合、ペルーの政党および政党制は、急速に変化を遂げる国民社会、とくに1980年代の厳しさを増した経済環境の下で、諸勢力を代表・吸収する能力を持たず、有権者との絶えざるフィードバックを通じて、話し合いによる利害調整とそれによる国民的政治統合という本来の機能を全く果たしてこなかったと言ってもよい。

それはひとつには、現代ペルーの政党がいずれも、その無謬性と全能性を特色とする創設者である最高指導者(jefe máximo)を頂点に、パトロン＝クライアント関係で下方に構造化された植民地期以来の伝統的家産制的性格を脱皮できずにいるためである(注4)。さらに1980年代に登場したベラウンデ、ガルシアの各政権は、それぞれAP(とPPC)、アプラ党による多数派政権であり、なかんずくペルー大統領の持つ強力な権限行使という制度的特色とあいまって、その間国会の機能が極度に弱められ、政権党として役割が著しく減退したことにも原因がある。そのため両政権とも、著しく高い支持率から極度の支持率の低下に見舞われる結果となった(第4図)。46%の得票率を以てベラウンデを当選させたAPは1985年選挙には与党

第4図 ベラウンデ政権、ガルシア政権の年平均支持率の推移(リマ首都圏, 1980~85, 85~90年)



(出所) 毎月実施される DATUM 社による世論調査に基づき筆者作成。

候補者に7%しか確保できなかった。また1985年8月、96%に達していたガルシア政権の支持率は、89年3月には6%まで下落した(注5)。現代ペルー政治を特徴づけるいわゆる「政治的消耗」(desgaste politico)という現象は、政治と社会がいかに乖離しているかを如実に示すものである(注6)。

このことは、今日までの世界共産主義運動に登場したイデオロギーの流れすべてを反映した万華鏡である左翼勢力についてもしかりである。そのうち議会主義を標榜する7党派の選挙連合であるIUは、伝統的な政党構造に加えイデオロギー的対立を内包しているだけに、激変する社会への対応能力はきわめて時代遅れとなっている。

また左翼勢力の基本的支持母体である労組についても同様のことが指摘できる。長期にわたり労組の指導層が固定しているため、下部勢力との間に大きな距離が生じている。また15年来の厳しい経済危機の結果、今日インフォーマル・セクターが経済活動人口766万人のほぼ60%(注7)に、また

失業率が不完全就業を含め80%（1989年、リマ首都圏）に達し、賃金労働者の経済活動人口に占める割合が減退してきたという就業構造の著しい変化を前に、既存労組は労働安定法のような既得権益にしがみつくなり、インフォーマル・セクターを組織に取り込む柔軟性も創造性も持ちえず、その組織動員力は著しく減退した（注8）。

（注1） 遅野井茂雄「ペルーの政治社会変動——転換期社会に関する序論的考察——」（小坂允雄・丸谷吉男編『変動するラテンアメリカの政治・経済』アジア経済研究所 1985年 第3章）参照。

（注2） 1990年にバラントス政権が誕生し、92年にチリ型の軍事クーデターで倒されることを想定した次の政治フィクション参照。Machado, Rodrigo, *Los potros de atila: el golpe de estado de 1992 en el Perú*, リマ, Mosca Azul, 1989年。

（注3） 大手調査機関 APOYO 社の世論調査部長 A・トーレスはこの層を「チチャ中道」（los centristas chicha）と規定し、有権者全体の25%と評価している。なおトーレスはこの他、自由主義者20%、アプラ党20%、集団主義者（左翼）10%、開明的中道10%、その他（無効票）15%に有権者層を類型している。Torres, Alfredo, “Hacia una nueva tipología política,” *Debate*, 第61号, 1990年8～10月, 18～20ページ。

（注4） 遅野井「ペルーの政治社会変動……」69～71ページ。

（注5） 数値は世論調査機関 DATUM が毎月実施している調査結果による。

（注6） この現象はベラウンデ（1963～68年）、ベラスコ（68～75年）、モラレス（75～80年）のいずれの政権についても指摘できる。

（注7） Villarán, Fernando, “El fenómeno Fujimori o la crisis de las ideas convencionales,” *Quehacer*, 第64号, 1990年5～6月, 31ページ。

（注8） Balbi, Carmen Rosa ; Julio Gamero, “Los trabajadores en los 80: entre la formalidad y la informalidad,” C. R. Balbi ほか, *Movimientos sociales: elementos para una relectura*, リマ, DESCO, 1990年。

なお農村では、農地改革の結果設立された協同組合の70%が組合員に分割され、法的保護を受けないインフォーマル・セクターを構成している。Mejia, José

Manuel, *La neoreforma agraria*, リマ, Cambio y Desarrollo, 1990年参照。

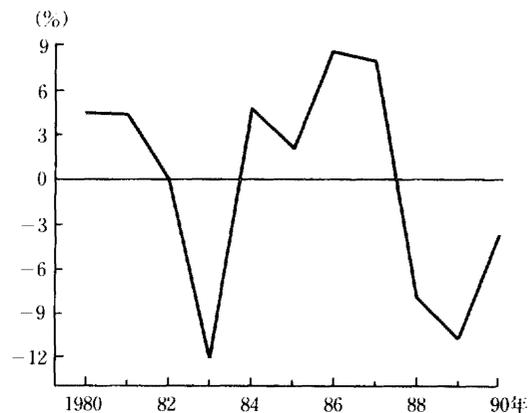
### III 政党政治への不信

#### 1. 2期民政の実績

民政移管の後に迎えた1980年代の2期民主政権は、高い期待と深い挫折感をそれぞれ国民に経験させ、伝統的政治家と政党政治そのものに対する国民の不信感を著しく増幅させた。

まず経済実績で見ると、両政権とも初期の比較的良好な環境を堅実な経済運営によって持続的成長に結びつけてゆくことができず、ベラウンデ政権の場合は1983年に-12%成長、またガルシア政権の場合は88, 89年にそれぞれ-8.0%, -10.9%成長と未曾有の経済破綻に至らしめた（第5図）。とくにガルシア政権末期には、4桁のハイパーイ

第5図 経済成長率の推移（1980～90年）



（出所） 国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会（ECLAC）相原好江・幡谷則子「1984年 ECLAC ラテンアメリカ経済報告（要約）」（『ラテンアメリカ・レポート』第2巻第1号 1985年3月）／同委員会 山岡加奈子・浜口伸明抄訳「1990年 ECLAC ラテンアメリカ経済速報」（『ラテンアメリカ・レポート』第8巻第1号 1991年3月）より筆者作成。

ンフレとなり、1980年代の1人当りの国民所得の落ち込みは、30.2%とラテンアメリカでは内戦を経験したニカラグアに次ぐ規模となった。この間の実質賃金は約30%台に低下し、今日ペルー国民の生活水準の低下は目をおおうばかりである(注1)。

次に、1980年の民政移管とともに始まった毛沢東主義を標榜するセンデロ・ルミノソ(輝ける道。正式名はペルー共産党センデロ・ルミノソ[PCP-SL])と、84年以降開始したツパク・アマル革命運動(Movimiento Revolucionario Tupac Amaru: MRTA)の武装活動に対し、両政権とも適切かつ有効な対策を講ずることができず、治安情勢を全般的に悪化させた。ペラウンデ政権は、アヤクチュ(AYACUCHO)県での初期の治安事件を軽視し、その本質を理解できず約2年間にわたり活動を放置してセンデロ・ルミノソの勢力拡大を招いた(注2)。また1986年の刑務所暴動事件に際し約300名のテロ容疑者を平定治安軍が殺害することをガルシア政権が容認したことは、治安当局による人権侵害の頂点に立つものであり、国民の公権力に対する無力感をこれほど高めたことはない。テロ活動と政府軍による鎮圧は、国民相互に不信感をつのらせ、ロンダ(Ronda)といわれる自衛組織を拡大させ、統合度の低い「群島社会」(archipiélago social)を一層亀裂の深いものとした。上院和平委員会の報告によれば、この10年間で1万9263名の犠牲者が生じ、1982年アヤクチュ市に発動された非常事態宣言は、今日全人口の半分が住む地域に拡大するに至っている(注3)。

さらに、政治家に対する不信を決定的にしたのは、民政2期の際に各政権党を中心に腐敗が著しく進んだことである。ペラウンデ政権末期には、首相のお膝元で麻薬事件が発生し(ビリャ・コカ[Villa Coca]事件)、ガルシア前政権下では、麻薬

事件への関与が発覚したアプラ党国会議員が議員特権の下で行方をくらませた(デル・ポマル[Del Pomar]事件)。付与されたそれぞれの管轄・権限の下で、公人が私腹を肥やす植民地以来の腐敗の構造が、不況下ではあらゆる面で一層目立つものとなった。「金が政治を動かす」、「政治家は民衆を操作するだけ」とする既存政治家に対する不信感が1980年代にいかに増大したかは、参加・開発研究所(Centro de Estudios para el Desarrollo y la Participación: CEDEP)などの調査が示しているところである(注4)。

## 2. IU(統一左翼)の分裂

本来ならば、保守、中道各政権の挫折は、左翼IUの政権到達の可能性を強めるはずであり、また一時はそう見られていたとすでに述べた。もしIUが1990年選挙を前に分裂せず、なおかつペルー国内の社会変動のダイナミズムを追い風とし、歴代政権の失政に対する国民の不満を吸収し、さらに中間層・保守層向けには、社会主義圏をめぐる世界情勢の変化に有効に呼応することができていれば、それは十分可能であったはずである。

IUの分裂は、皮肉にも1987年12月の全国人民代表者会議(Asamblea Nacional Popular: ANP)の成功を踏まえてIUが7党の選挙連合から、単一党员証の発行による単一政党へと民主的脱皮を図ろうとする段階で発生した。とくに合法的な政権奪取の可能性を前にして、大統領候補者問題、つまり連合結成以来の議長でリマ市長(1984~86年)を務めたIU最有力候補バランテスの去就をめぐる内部対立を激化させ、結束よりは遠心力を強めるに至った。

IU内には、そもそも最終的には武力闘争を辞さないとする急進派(統一マリアテギスタ党[Partido Unificado Mariateguista: PUM]、革命左翼同盟[Unión

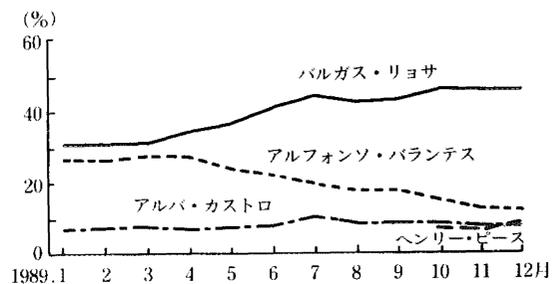
de Izquierda Revolucionaria: UNIR], 労農学人民戦線 Frente Obrero Campesino Estudiantil y Popular: FOCEP)) と、あくまでも議会主義の枠内での勢力強化を狙う穏健派=バルンテス派(革命社会党 [Partido Socialista Revolucionario: PSR], 革命共産党 [Partido Comunista Revolucionario: PCR])との対立が底流に存在しており、その間で中間派(ペルー共産党統一派, モスクワ系 [Partido Comunista Peruano-Unidad: PCP-U], 社会主義政治行動党 [Acción Política Socialista: APS])が均衡を保つ勢力として重要な役割を果たしてきた。その対立は、1986年のリマ市長選をめぐる、バルンテスが急進派の非協力的姿勢を批判し、逆にバルンテスがあまりにガルシア政権寄りであるとして批判してきた急進派は、87年5月19日のガルシア政権下で初のゼネストの扱いをめぐる、バルンテスが話し合い路線を推進したことでその対決姿勢を強め、バルンテスが同月31日 IU 議長を辞任するに至って頂点に達した。

IU の統一と選挙を前にした重要な大会と位置づけられた第1回全国大会を前に、各党派内の大会が開催された。穏健派はバルンテス擁立をいち早く掲げ、「社会主義的合意」(Acuerdo Socialista: AS) 派を結成しており、他方 PUM から内部穏健派2派(バルンテス派のマリアテギ地域委員会 [Comité Regional Mariateguista: CRM], 反バルンテス派の革命マリアテギスタ党 [Partido Mariateguista Revolucionario: PMR]) が分離し、さらにヘンリー・ピース (Henry Pease) 全国大会開催実行委員長を中心とするカトリック系大学知識人は、中間派として社会主義確認運動 (Movimiento Afirmativo Socialista: MAS) を旗揚げするなど、IU 内再編が慌しく進んでいた。

1989年1月19日ワンパニ (Huampani) で開催さ

れた全国大会の最終日、IU 穏健派は新中央執行委員会メンバー選出が民主的でないとして反対を唱え IU から分離した。穏健派としては、1990年選挙に勝利するためには、急進派を IU から放逐し、中間派の最大勢力で、最大労組であるペルー労働者総同盟 (Confederación General de Trabajadores del Perú: CGTP) を擁する PCP-U を取り込み、民主主義を擁護する穏健な社会 (民主) 主義勢力としての立場を内外に示し、保守・中間層、軍部、カトリック教会、ひいては米国など国際的支援を得たいとの戦略であった。逆に急進派は、IU の統一を盾に穏健派の分派行為を非難し、新執行部議長に PCP-U のデル・プラド (Del Prado) 議長を選出することで PCP-U を取り込み、事実上バルンテスを排除することに成功した。この全国大会の結果バルンテスは、IU の大統領候補として当然視されることはなくなり IU 予備選への参加を余儀なくされたが、穏健派を欠いた IU 内で勝てる見込みもなく、1989年9月予備選不出馬を確認し、社会主義左翼 (Izquierda Socialista: IS) として独自に立候補届け出を行なった。しかし IU の大統領候補者決定問題は、この分裂劇を経て、グスタボ・モーメ (Gustavo Mohme, APS), アウグ

第6図 大統領選挙——世論調査結果の推移 (リマ首都圏, 1989年1~12月。APOYO 社による)



(出所) *El Comercio*, 1989年12月22日。

第1表 リマ市地方選挙結果 (%)

	市長レベル	区長レベル
オ ブ ラ ス	45.15	—
フ レ デ モ	26.79	40.21
ア プ ラ 党	11.53	16.00
IU	11.54	19.44
ASI	2.15	5.50
他	2.85	18.85
	100.00*	100.00

(出所) Roncagliolo: Rafael, "Elecciones en Lima: cifras testarudas," *Quehacer*, 第62号, 1989年12月~90年1月, 12~20ページ。

(注) \*四捨五入の関係で100.00%にならない。  
オブラスは区長選に候補者を立てず。

スティン・アヤ (Augustin Haya, PMR) の間で行なわれた予備選では決着がつかず (話し合いによる一本化を主張した PCP-U は予備選棄権), 話し合いでピース全国大会開催実行委員長 (MAS) を立て、バランテスとの間で分裂選挙に突入した。

この分裂劇は、左翼勢力のイデオロギー優先、対立姿勢といった伝統的体質を再度有権者の前に曝け出すこととなり、また分裂した左翼への投票は「失われた票」になるとみなされ、左翼全体の支持率の低下を招くことになる。それまで無党派層にも支持を受けバルガス・リョサと支持率で双璧を成してきたバランテスの支持率は、1989年5月以降急落し同年12月には10%にまで低下した(第6図)。またこの間、1989年11月実施されたりマ市長選挙では、分裂した左翼勢力は IU 12%, 左翼社会主義的合意 (Acuerdo Socialista de Izquierda: ASI [元 AS]) 2%とそれぞれ 4, 5 位に転落した(第1表)。

### 3. 「ベルモン現象」

1989年11月の統一地方選挙は伝統的政治家に対する不信感がいかに高まりつつあるかを雄弁に物語る結果となった。

リマ市では、テレビ (11チャンネル)・ラジオ局

(RBC) の所有者で、テレビ・ラジオのパーソナリティーとして、とくに民衆との直接対話や福祉事業を通じて有名であったリカルド・ベルモン (Ricardo Belmon) が、フレデモ (民主戦線 [Frente Democrático: FREDEMO]) の統一候補ファン・インチャウステギ (Juan Incháustegui) を始め IU の H・ピース大統領候補、アプラ党のメルセデス・カパニリャ (Mercedes Cabanillas) 教育相、ASI のエンリケ・ベルナレス (Enrique Bernales) 上院議員など各党の有力候補を大幅に引き離して当選した (第1表)。ベルモンは、従来の政治家が言葉を先行させて実績を残さなかったことに対する有権者の不満を、オブラス (事業 [Obras]) 党という新党に誘導し、何ら政策の発表を行なうことなく当選したのであった。第2の都市アレキパ (Arequipa) でも同じような結果となり、有権者が既成政治家ではない、無党派で新しいイメージを持つ人物を求め始めていたことを如実に示す結果となった。この「ベルモン現象」と呼ばれた無党派候補待望のムードは、作家バルガス・リョサを直接、利するものと考えられた。

(注1) 国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会 (ECLAC) 山岡加奈子・浜口伸明抄訳「1990年ECLACラテンアメリカ経済速報」(『ラテンアメリカ・レポート』第8巻第1号 1991年3月) 52ページ。

(注2) Gorriti, Gustavo, *Sendero: historia de la guerra milenaria en el Perú*, リマ, Editorial APOYO, 1990年。

(注3) *Resumen Semanal*, 第602号, 1991年1月4~10日, 6ページ。

(注4) Chaves, Eliana, "Votaron los informales por Fujimori?: una reveladora encuesta," *Quehacer*, 第64号, 1990年5~6月, 42ページ。

#### IV バルガス・リョサの登場と失速

##### 1. リベルタ（自由）運動（ML）

バルガス・リョサの政治的指導者としてのデビューは、1987年8月21日サン・マルティン広場における銀行国有化反対市民集会であった。

1985年、若干35歳で大統領に当選したガルシア大統領は、就任後、対外債務支払い「10ヵ条原則」に基づく国際金融界との対決姿勢を打ち出し、国内的には賃金引き上げ・価格凍結などの内需拡大策により初期の間、高成長を記録し、その独特のカリスマにも支えられて国民の高い支持を得た。しかし、ガルシア主導によるいわゆる「非正統派的」経済調整は、急激な景気加熱のため外貨準備の枯渇と生産能力の天井を招き、1987年前半には危機の兆候を呈していた。ゼネスト発生など左翼勢力との協調は終焉をむかえ、アプラ党ナンバー2と目されたアルバ・カストロ(Alva Castro)首相兼経済相(第1副大統領)の閣僚辞任と下院議長への立候補・当選という「造反」、さらには後任の党人政治家ラルコ・コックス(Larco Cox)首相の下で芽生えつつあった国際協調・現実主義政策への転換の動きという党サイドからの巻き返しが強まった。こうした閉塞状況を克服し、自己の指導性の回復を図り、さらには左翼勢力の支持を取り留めるため、ガルシアは党幹部に囚らず一握りの顧問との間で、ロメロ・グループ(Grupo Romero)など民間金融権力の弱体化と信用の民主化を目指して、銀行等民間金融機関を国有化することを決定し、1987年7月28日の国会演説で発表した。この決定は保守勢力のみならず中間層の猛反発を招き、与党内にまで波紋を広げ、その後法案審議をめぐり約1年間の政治的空白を生じ、ガル

シア大統領の支持率を雪崩を打つように低下させることになる。まさにガルシア政権下にとって転換点となる事件であった(注1)。

この銀行国有化を、バルガス・リョサはガルシア政権の全体主義化の兆候であると批判して、自由主義擁護の論陣を張るとともに、サン・マルティン広場での大集会に引き続き、アレキパ、ピウラ(Piura)両市で、「リベルタ」(自由)を叫ぶ国有化反対運動を盛り上げ、銀行国有化政策に根本的な制約を課すことに成功した。この反対運動は、リョサがその後指導することとなる中間層・保守層を中心とする無党派市民過動「リベルタ運動」(Movimiento Libertad: ML)の原型となった。

リベルタ運動は、イデオロギー的には、自由を進歩と正義実現の最良の用具とみなし、市場経済原理の徹底を標榜しつつ、現代世界の経済発展をリードする自由世界との一体化による近代国家への脱皮を目標とした。これは、インフォーマル・セクターに資本主義経済発展をリードする民間活力の発露を認め、国家主義的介入と保護による重商主義政策が膨大なインフォーマル・セクターをもたらしたと指弾し、同セクター解消の処方箋を自由化と規制解除に見出すに至る「もう1つの道」(El Otro Sendero)の著者エルナンド・デ・ソト(Hernando de Soto)自由民主協会(Instituto de Libertad y Democracia: ILD)会長とともに、1980年の民政移管に際しハイエクなど自由主義経済の世界的論客を招いて、自由主義経済理念の普及に努めてきたバルガス・リョサの思想的転換の政治的結実であった。また同運動の結成こそは、1985年選挙を経て守勢に立たされてきた保守勢力が国有化問題を機にイデオロギーを以て団結を見せ、ペルーの諸問題解決に当たろうとする政治的意思の現われ、政治的巻返しと捉えられるものであ

り、ペルーにおけるニュー・ライト誕生の瞬間であったと言える。

## 2. フレデモ（民主戦線）の誕生——その強さと弱さ

1988年1月、バルガス・リョサは、ベラウンデ AP, ルイス・ベドヤ (Luis Bedoya) PPC 各党首と、北部海岸の保養地プンタ・サル (Punta Sal) でトップ会談を行ない、90年選挙に向けた連合、「民主戦線」(フレデモ)の結成に基本合意した。翌1989年4月14日、同3党首は「政府綱領の基礎(1990~95年)」に署名し、正式に「戦線」を発足させ、同年6月4日バルガス・リョサを大統領候補に擁立した。

この時点でフレデモは、(1)ガルシア政権の失敗によるアプス党への支持の低下、(2)代案となるべき左翼勢力の分裂と弱体化、(3)世界的に著名で、その独立した立場、真摯な人柄、国の再建と近代化によせる道義的責任感の強さで知られる人物を候補者に据えたこと、(4)自由化と市場経済を求める世界およびラテンアメリカの潮流など、追い風ともいべき諸条件を得て、資金力も十分に最も政権担当準備のある勢力と見られ、世論調査でも1989年6月に支持率が40%を超え、10月以降12月まで45%という高支持率を維持する(第6図)。

しかし、なぜバルガス・リョサは伝統的政党との連携構築に拘泥したのか。それはリョサの当選の可能性を考えた場合、強さにも弱さにもなりうる両刃の剣であった。リョサは、自己の知名度と国有化反対運動に見せた動員力をてこに、リベルタを中心に無党派層を動員して選挙を勝ち抜く可能性も十分あったはずである。実際リョサは、シルバ・ルエテ (Silva Ruete) など経済テクノクラート勢力(連帯と民主 [Solidaridad y Democracia: SODE]), フェレロ・コスタ (Ferrero Costa) 前弁護

士協会会長など無党派著名人をリベルタ運動を通じてフレデモに参加させる動員力を備えていた。

にもかかわらずリョサは連立が無理ならば大統領選には出馬しないとして、自ら3勢力体制を築きそれを維持していったのは、恐らくリョサが選挙のやり方についてきわめてオーソドックスな方法に立脚していたためであろう。いかに自己の動員力に自信があったとしても、中央はともかく地方においては集票マシンを持つ旧来の政党に依拠する以外になく、ましてや既存保守勢力を相手に戦うことは全く勝算が無いと考えていたためであろう。その際、リョサが同盟を組みうる相手は、1980~85年の間政権について挫折し、国民の不信を高めていたとはいえ、政治思想面からしてもまた人的繋がりからしても AP, PPC 以外にはありえなかった(注2)。

またサン・マルティン広場の大集会も、米国流の集会そのものであったし、米国の広報会社ソーヤーズ&ミラー (Sawyers & Miller) 社の支援の下に行なったメディアを駆使した大量の資金投入による選挙キャンペーンにもそれは現われていた。リベルタ運動の国会議員立候補比例代表名簿に、財界最大のロメロ・グループを代表するミゲル・ベガ (Miguel Vega) を始め、白人の経済界首脳経験者がずらり名前を連ねたのも、選挙には金がかかるものという意識の反映であり、明らかに選挙資金の手当ての必要性を配慮してのことであった。これらの点は、のちに見るフジモリ陣営とは全く対照的であった。

しかし、このリョサの伝統的アプローチは、その後のキャンペーンにおける無党派の代表としてのリョサのイメージに重大な影響を与えてゆく。すでに、リョサが保守政党との連携を明らかにしたとき、それまで盟友と言えたデ・ソトはリョサ

から離れた。党派にこだわらず、現実主義の立場から体制の刷新のみを狙うデ・ソトは、保守両党のなかに国家主導による保護主義（重商主義）の強い残滓を認めていたからである。リョサとしては、政権就任後はリベルタが経済運営を担当することでそうした保護主義の残滓から自由になり、構造改革を断行できるものと踏んでいた節がある<sup>(注3)</sup>。しかし実際、国家の役割、市場経済の在り方をめぐり、リョサ周辺の若手急進派リベラリストと保守2党、とくにAP関係者との間で政策上の齟齬が表面化していたことは選挙を戦ううえでマイナスであった。また、統一地方選挙の取り組みにおいて、フレデモの旗の下で戦うべしとするリベルタと、各党の地方におけるダイナミズムを失うべきでないとするAPとの間で対立が生まれ、1989年6月21日、リョサが大統領候補辞退を表明するに至った事件は、リョサの顔を立てる形でAP、PPCが譲歩し辞退表明が撤回されることで収拾されたが、これも3勢力の連携の難しさと内部凝集力の弱さを物語っていた。さらに1989年12月、89年経営者年次総会（Conferencia Anual de Ejecutivos：CADE）で、リョサがリベルタを中心に練られた徹底した自由化と厳しい安定化策を骨子とするフレデモ新政権の行動計画を明らかにしたのを機に、国家の保護の下で成長してきた経済界の一部から批判的言動が生ずるに至り、将来のフレデモ新政権との間で交渉の余地を持たせるためにも、リョサが1次投票で過半数を獲得することだけは阻止すべきであり、そのためにも国内産業の保護を掲げるバランスに投票すべきといった動きも見られはじめた。重要な時期におけるペルーの保守・経済支配層の団結の弱さ、ひいてはフレデモの弱さを物語るものであったと言えよう<sup>(注4)</sup>。

こうした矛盾と対立を内包していたとはいえ、フレデモは統一地方選挙で、リマ市長選挙を除く主要都市で善戦し、全国レベルで第1勢力としての力を証明した。リマ市では区長選で圧勝し（第1表）、バリアーダス貧困区の多くを左翼とアラ党から奪回した。またベルモンの勝利は、無党派の勝利でありフレデモの勝利でもあると考えられた。1989年12月まではリョサの個人的人気がフレデモ全体をリードしていたと言えるわけであり、「90年選挙はすでに決せられた」、「当選するのは時間の問題である」と見られ、翌1月には、1次投票で過半数を超すとの世論調査も現われ、その可能性すら取り沙汰されたのである<sup>(注5)</sup>。

### 3. バルガス・リョサの失速

しかし1990年2月終わりから3月初めにかけて、世論調査でリョサの支持は伸び悩み傾向、むしろ低下傾向すら見せはじめ、「支持は天井に達した」と指摘された<sup>(注6)</sup>。世論調査結果公表最終日の3月24日に発表された世論調査で、リョサは40%台前半、41%という結果も現われ、2次選は必至と見込まれた<sup>(注7)</sup>。

バルガス・リョサが失速し始めたのはなぜか。まず第1に、この時期国会議員選挙のキャンペーンが本格化したことによる。大統領選挙と同時に実施された上下両院議員選挙は、各党の提出した比例代表名簿を基礎に実施されたが、有権者は党に投票するだけではなく、選好により名簿の具体的候補者に投票する（義務ではない）。つまり名簿非拘束式比例代表制と優先制を抱き合わせる方式で行なわれたため、各候補者は個人得票で優位につけるべく、しのぎを削って本格的活動を開始した。とくにフレデモ系各候補者は、莫大な資金力を背景に、連日テレビ・ラジオのスポットを通じてリョサの持つ個人的イメージをてこに知名度の

浸透を図った<sup>(注8)</sup>。とくに選挙妨害を最大の目標とするテロ組織による治安情勢悪化の懸念もあり、キャンペーンは集会よりもマス・メディアに集中した。そのためフレデモ系候補者のキャンペーンは、「飽和状態」に達し「飽きられ」、むしろ厳しい経済状況下での好ましくない金権選挙として有権者の反感をかい、リョサ自身のちに回想しているように、そうした宣伝合戦のなかにリョサの斬新なメッセージが埋もれ、とりわけ信用のおけない政治家がバルガス・リョサの周りにいる、リョサは権力に飢えた伝統的政治家の道具にされるとみなされ、リョサの持つ無党派としての独立した斬新なイメージが損われた<sup>(注9)</sup>。また、リョサはこの宣伝合戦を自粛するように働き掛けたが、AP、PPC 両党候補者はそれに従わず、逆にフレデモ内でのリョサの統率力の無さを露呈する結果となった<sup>(注10)</sup>。

第2に、物ごとを率直に述べ、あまりにも透明感を持たせるリョサの政治スタイルに関わるものである。リョサは明らかに「こそこそ話す卑しい暗黙の合意」と19世紀の思想家ゴンサレス・プラダ(González Prada)が特徴づけたペルーの伝統的政治文化<sup>(注11)</sup>を打破しようとし、それが初期の間は斬新なイメージとなって国民の支持を高めたことは疑いない。しかし選挙戦が終盤にさしかかり、他陣営からの挑発がなされ泥仕合の様相を呈し始めると、そうした透明感はむしろマイナスに作用する。リョサ個人について言えば、すでに世界的名声を確立したプライドの高い作家にとって、いわれの無い個人的中傷は堪えきれず、不注意にも政治的波紋を考えずに反応する、あるいは感情的になって取り乱し、大統領としての資質を疑わしめるような場面があった。

1989年 CADE 経営者年次総会でリョサは、自

由で開かれた競争的な経済社会の建設と機会均等の供与を表明するとともに、経済政策については、大幅な価格調整によるインフレ克服(1年後に年率10%)、経済の自由化、関税の大幅引下(2年間に15~20%)、有力公社70企業の民営化、省庁の半減化などの徹底した行政改革、労働安定法・スト法の見直し、義務教育の見直しといった大胆な経済構造改革案を発表し、2年間は不況を招来しきわめて厳しいものとなろうが、内外の支援を得て最貧層対象の社会支援計画(Programa de Apoyo Social: PAS)を3年間実施することで乗り切り、将来の近代化へ向けた離陸へ繋げたいと表明した<sup>(注12)</sup>。非常に具体的で透明感を持つこのオーソドックスな政策は、危機解決の「ショック療法」と呼ばれ、他の候補者は一斉に「ショック反対」を表明した。とくに5年間一貫して国際金融機関に背を向けて、オーソドックスな政策に反対してきたアプラ党は、政権党としての立場を駆使し、リョサの政権到達阻止に照準を合わせた大々的キャンペーン、とくに「ショック政策」を死に至る民衆のイメージと結びつける「ショック反対」のキャンペーンを精力的に展開した。フレデモの政策は、「ショック」対「反ショック」、フレデモ対反フレデモに国論を分裂させるに至った。分極化の高進は、過去10年間にわたる治安情勢悪化のなかで、国民には堪え難いものに映った。

リョサは、フレデモの掲げる政策を唯一絶対視し、それ以外の方法ではペルーは救えないとして非妥協的・十字軍的姿勢を示し、国民は将来を信じ、それを履行するためのマンドート(絶対過半数)を与えるよう懇願した。もちろんポピュリズム政治からの脱却を重視し、民衆に嘘はつけないというリョサの謙虚さは理解できるし、2年以上の厳しい経済情勢を承知のうえでリョサに国民が

投票すれば、それは明らかにペルーの政治文化を大きく変えることになったであろう。しかしそこに、世論調査の高支持率を背景としてリヨサを始めフレデモ関係者が自信過剰となり、悪く言えば傲慢となった傾向は無かったか。有権者にとってそれは白人の金持ちによるプランの押しつけと映り、あまりに攻撃的であるとして疎んじられ始めるのも無理はないであろう(注13)。

したがってリヨサは、未曾有の危機を前にして必要性が叫ばれつつあった国民合意を最後まで拒否し、ペルーを破綻に導いたアプラ党と共産主義勢力とは合意は不可能であるとの立場を貫いた。とくにアプラ党とガルシア政権に対する攻撃は鋭かった。しかし家族的団結・連帯を特徴とするアプラ党は、攻撃されればされるだけ結束を強くする特質を歴史的に持つから、この反アプラ姿勢は節度を超える場合は逆効果となる。またアプラ党政権下の閣僚に攻撃が及んだ際は、閣僚経験者の軍人から反発を招き、出世作「都会と犬たち」以来とかく指摘されてきたリヨサの反軍思想を逆に想起させる結果となった。

第3に、リヨサのヨーロッパに寄せる憧憬である。彼は、ペルーの発展の行きつくところをヨーロッパに求めて、あえてそれを公言した。リヨサの周りには白人の文化人や企業家が集まった。国会議員リストもそうであった。そこには、彼が資本主義的発展の原動力、民衆資本主義(capitalismo popular)の主役と考えた、農村から都市に住みついた混血の民衆の姿は無かった。高邁な民衆資本主義の考え、ペルーを資産家の国にしたいとする考えは、フレデモのなかには全く具体的代表を欠く実体の無いものであり、フレデモの運動は民衆層との著しい乖離を孕んでいたと言わざるをえない。民衆層に見られたフレデモ支持は、候補者さ

えあれば他へ容易にシフトしうる性質のものであった(注14)。

(注1) ガルシア政権の挫折過程については、遅野井茂雄「ペルー・ガルシア政権の分析——ポピュリスト政権の挫折——」(『国際政治』[日本国際政治学会]第98号 1991年10月)参照。

(注2) バルガス・リヨサの長男でフレデモのスポークスマンを務めたアルバロは最近刊行した回想録のなかで、次のように述べている。「各地域で効率的に戦える党構造をゼロから築くことは不可能と考えられていた……。われわれには、2政党(AP, PPC——引用者)が全国で堅固な党基盤を持っているものとの誤った印象があった。時を経るにつれて、それが夢物語であることがわかった」。そして、支障が出るたびにフレデモの解散がリヨサ周辺で検討されるが、一度結成したものを解散することについてリヨサは、便宜主義的、不誠実として最後まで抵抗したという。Vargas Llosa, Alvaro, *El diablo en campaña*, マドリード, El Pais, 1991年, 33~34ページほか。

(注3) デ・ソトのインタビュー, *La República*, 1989年3月26日, 10~12ページ。

(注4) Campodónico, Humberto, “Fredemo, tampoco recibe mandato claro de los empresarios,” *Quehacer*, 第64号, 1990年5~6月, 25~29ページ。

(注5) この辺の消息は、南宏介「作家はペルーを救うか：バルガス・リヨサの政治プラン」(『ユリイカ』第22巻第4号 1990年4月)80~85ページが、よく伝えている。

(注6) *SI*, 第161号, 1990年3月12日, 6~9ページ。

(注7)	APOYO 社 (%)	POP 社 (%)
フレデモ	42	41
アプラ党	16	19
IU	10	11
IS	12	8
その他	6	4
未回答	12	17
	100*	100

(全国レベル)

(注) \*四捨五入の関係で100%にはならない。

(注8) 1次選で費やされた宣伝費用全体の党派別割合はフレデモ62.8%, アプラ党14%, IS 7.6%, IU 0.8%で、フレデモは1200万<sup>ソル</sup>に達した。*Caretas*,

1990年4月10日。

(注9) リョサの *El Pais* 紙との会見記。 *La República*, 1990年6月21日, 14~15ページに再録。

(注10) Vargas Llosa, Alvaro, 前掲書, 130ページ。

(注11) 遅野井「ペルーの政治社会変動……」70~71ページ。

(注12) *Acción para el cambio* (CADE 総会に提出されたフレデモの政策パンフレット)。

(注13) 自信過剰の最たるものは、政権到達を当然視したうえで終盤の1990年3月7~9日に、「自由主義革命世界大会」をリマで開催したことであろう。

(注14) Villarán, 前掲論文/*Caretas*, 第1112号, 1990年6月12日のリベルタ運動の青年指導者エンリケ・ゲルシ (Enrique Gherzi) の発言。また政治学者のロスビグリオンは、フジモリ個人に対する評価よりリョサに対する拒絶が選挙戦を左右する重要な要素となったと結論づけている。Rospigliosi, Fernando, “Polarización social y desprestigio de los partidos políticos: los sorprendentes resultados de las elecciones peruanas de 1990,” IV Curso Annual Interamericano de Elecciones での報告ペーパー, 42ページ (Instituto Interamericano de Derechos Humanos 主催, サン・ホセ, 1990年9月15~19日)。

## V フジモリ現象

### 1. 第3のオプション

1次選挙の1990年4月8日の6ヵ月前と3ヵ月前にそれぞれ、カンビオ90(変革90年[Cambio 90])の大統領候補, 上院議員候補として立候補してから同年3月初めまで, アルベルト・フジモリの名前はいずれの世論調査結果にも現われず, 「その他」に含まれる候補者にすぎなかった。大統領選挙を前に行なわれた各団体主催の政策発表会にも高等軍事研究所(Centro de Altos Estudios Militares: CAEM)を除けば, いずれからも声がかからない存在であった。

世論調査にフジモリが顔を出すのは, 1990年3月24日のCPI社の最終公表世論調査に4.8% (5

位)と出たのが最初である(注1)。大統領候補者9名中の主要候補者4名に続く候補者として初めて頭角を現わしたのであった。しかしこの段階でも, 各調査機関, 選挙分析の専門家のほとんどが, 既存の政党政治, つまり保守(フレデモ), 中道(アラ党), 左翼(IU, IS)の図式のなかで選挙戦の動向を分析しており, 2次選が必至であるとして主要候補の残り3名のうち誰がリョサについて2位につけるかに焦点を当てていた。刻々変化する選挙戦の流れを適確に読み取り, 選挙分析の通常のパラダイムに決定的な転換を迫るのはフジモリの巧みな選挙戦術であった。とくにフレデモと反フレデモに分極化し, 中道に候補者がいなくなった段階で, 民衆層のうちの浮動票に対し, フレデモでも既存勢力でもない新たなオプションをフジモリが提供することとなる。

フジモリは, カンビオ90の政策をリョサとは異なり, 具体的に示したわけではない。むしろベラウンデ, ガルシアに似た漠然とした政策の提示であったと言ってよい。選挙用に作られたパンフレットによれば, カンビオ90を, 真の革新勢力と規定し, 党派やイデオロギーに捉われず, 生産を刺激し, 倫理道徳・キリスト教精神・連帯に基づく人道的・技術的政策を推進し, とくに手工業, 零細・小企業つまりインフォーマル・セクターに見られる民間の企業発意を重視する中道勢力と位置づける。既存政党については, 1980年代政権を担当し国を危機に陥れ, さらに異なった名前(フレデモ)のもとで政権に復帰しようとしていると指弾し, カンビオ90はそれら既存勢力には与しない独立勢力であり, 豊かな資源を持つ国と創造性に富む国民を21世紀に向けて強化し, 環太平洋の主役とすることを目指す第3の代替勢力として自己をアピールしている(注2)。

## 2. フジモリの静かな選挙戦

マスコミのスポットが当たるまでのフジモリの選挙活動は、水面下の静かではあるが、都市、農村において多数派を形成している民衆層に照準を合わせたきわめて地味でかつ地道なものであったと言うことができる。

フジモリは、カンビオ90の第1副大統領候補にクスコ(Cusco)県出身の混血(チョロ)で、リマに出て工場主となり成功したサン・ロマン(San Román)中小企業連盟(Asociación de la Pequeña y Mediana Industria del Perú: APEMIPE)会長を据えた。同連盟は、全国工業協会(Sociedad Nacional de Industrias: SNI)の中小企業部会ではなく、インフォーマル・セクターの零細・小企業を組織化した連盟であり、フジモリは組織を通じて同セクターの票の掘り起こしを行なった。また灯油の調理器具「スルへ」(Surge)を低所得層家庭に普及させた工場主フリアン・ブスタマンテ(Julián Bustamante)もカンビオ90の上院議員候補者リスト上位に名を連ねた。

第2副大統領候補には、ペルーのプロテスタント系教会各派をまとめた全国エバンヘリスタ協会(Concilio Nacional Evangélico: CNE)の会長を務めるカルロス・ガルシア(Carlos García)を据え、敬虔さと団結心の強さで知られる新教の教会・信徒を通じて、都市、農村部において戸別訪問、口コミ、ラジオ放送などを通じて地道に支持者を集めた。現状変革への強い意思を持つ信徒代表をカンビオ90の国会議員候補者の約半数に当て、「兄弟に投票しよう」として支持者を拡大していった(注3)。

もとよりフジモリは、自ら農学者・数学者であり、農科大教授・学長時代を通じ、同大学の各種農業プロジェクトを手掛け、関連農民と接し、地

方の農業問題を知悉し、評価を得ていた。さらに国立大学学長会議議長を務め、1987~89年には全国ネットワークの国営テレビ(7チャンネル)の政治討論番組「コンセルタンド」(協調して[Concertando])の総合司会を務め、必要性が叫ばれていた国民協調を進める人物として全国的に顔が知られていた。この時に培った人脈を駆使して活動していたことも想像できる。

こうした社会ピラミッドの底辺に対する静かで地道な選挙活動が、その後の支持者急増に繋がってゆく下地を成したと言えよう。

## 3. 「サムライ・フジモリが攻撃する」

しかしフジモリが1次選で2位につけた躍進はそれだけでは不十分であったと言わざるをえない。数少ない農耕用トラクターを駆使したキャンペーンに見られたようにフジモリ陣営には資金が不足していたこと、プロテスタント系信者の割合が絶対的に少ない(国民の約5%)こと、インフォーマル・セクターが組織化されているとはいいがたく、他党の介在もあることなどが、爆発的な伸びを制約する条件であった。

フジモリに有権者の目を向けさせ、1次選で約200万の票に結実させるきっかけを提供したのは、マスコミの力と言わざるをえない。資金不足を認識していたフジモリは、主義主張は度外視しても、利用できるものはすべて利用して自己に有利な方向に冷徹に選挙の流れを導いてゆく、実にすぐれた政治的能力を備えていた。

フジモリは1990年3月24日の段階で5番目の候補者として頭角を現わして以来、長い選挙戦の終盤で選挙報道に飽きていた有権者に、民族的にも話題をさそうひとつの特異な存在として現われる。フジモリは、日系人としての出自と容姿に関心を持つマス・メディアの要望にそって、日本の

伝統・習慣が家庭でいかに維持されているかをマスコミに曝け出し、ときには空手を演じ、着物を着て日本刀を振りかざすことすらして一躍マスコミの寵児として登場した。それは、日本の戦後の奇跡的復興と近年の経済大国としての台頭、勤勉な国民性といった日本および日本人、日系移住者に対するペルー人の高い評価と直接リンクされる形で紹介され、フジモリ自身、当選後の日本からの援助の拡大に大きな期待を含ませた(注4)。1次投票の10日前に発売された有力週刊誌『シ』(Si)は日本刀を抜く浴衣姿のフジモリを表紙に掲げ、「日本の奇跡」と主タイトルをつけ、「サムライ・フジモリが攻撃する。2世のテクノクラートは、驚くべきことにリマで3位」と副タイトルで紹介した(注5)。マスコミで紹介されるフジモリのアクションは、親しみやすいチニート(chinito [中国人の意。転じて日本人含む東洋系移民に対する呼び名])で、またその取り巻きも自分たちと同じチョロであるとして民衆層に見事に受け入れられていく。

マスコミは、競ってフジモリを紹介し、フジモリ候補の「誠実、勤勉、技術」という単純なスロ

ーガン、現状変革を目標とするその立場を電波と画像を通じて伝えたのである。その後、世論調査が公表されないため噂とメディアの憶測も手伝って、フジモリの名が市中に、また都市と農村の人的循環を経て地方に広がり、選挙直前のアレキパ、タクナ(Tacna)両市など地方での集会の成功を経て、フジモリ支持は爆発的に伸びてゆくのであった(注6)(第7図)。

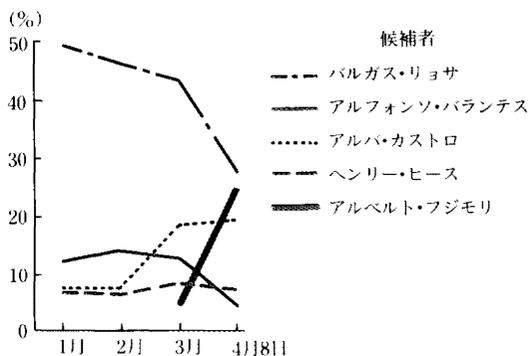
#### 4. 「投票箱の革命」

「フジモリ現象」を日々刻々肌で感じ、選挙直前には2位確定との判断を下していた分析家にも、1990年4月8日の投票結果は予想外のものであった。フジモリは1位リヨサに3万差と猛追し、リヨサは40万はおろか30万を割って27.6万しか獲得できなかった(第2表)。

フジモリは、リマ、アレキパ、カヤオ(Callao)、といった大票田県でフレデモと大接戦を演じ2位(カヤオでは首位)につけた他、ワンカベリカ(Huancavelica)、アヤクチョ、クスコ、プノ(Puno)、フニン(Junin)、パスコ(Pasco)といった貧困県で首位を獲得した(第2表)。これはフレデモ支援を表明してきたリマを始めとする大都市の浮動票と、従来左翼・アブラ党に流れた貧困県の票の多くがフジモリ陣営にシフトしたと読むことができる。

このフジモリの驚くべき浮上は「投票箱の革命」と呼ばれることになるが、その様相を顕著にするのは2次決選投票である。都市の貧しい人々、つまりチョロ、露店商、小企業者、庭師、といった民衆層が農民とともに、フジモリを自らの代表として明白な意思表示をすることになるからである。1次選後、グラウ(Grau)通りに面したカンビオ90の選対本部には、地方出身者、混血の民衆たちが列を成して競うように登録した。外国

第7図 1次選までの支持率の推移(1990年1～4月)



(出所) CPI社の世論調査より筆者作成。

第2表 大統領選挙 1次選

県名	投票総数	フレデモ	カンピオ90	アブラ党
<b>Aグループ</b>				
1 アプリマク	96,161	8,254( 8.58)	15,419(16.03)	7,209( 7.50)
2 ワンカベリカ	95,084	17,338(18.23)	22,683(23.86)	5,021( 5.28)
3 アヤクチョ	117,174	17,706(15.11)	21,661(18.49)	10,577( 9.03)
4 カハマルカ	307,030	61,605(20.06)	12,509( 4.07)	101,868(33.18)
5 ワヌコ	126,582	30,076(23.76)	21,688(17.13)	15,710(12.41)
6 クスコ	312,589	40,827(13.06)	91,155(29.16)	37,545(12.01)
7 アマソナス	66,962	17,276(25.80)	1,354( 2.02)	21,233(31.71)
(小計)	1,121,582	193,082(17.22)	186,469(16.63)	199,163(17.76)
<b>Bグループ</b>				
8 プノ	346,349	22,747( 6.57)	98,677(28.49)	44,096(12.73)
9 サン・マルティン	131,435	41,509(31.58)	6,145( 4.68)	29,749(22.63)
10 ビウラ	444,933	115,276(25.91)	59,333(13.34)	116,094(26.09)
11 アンカシュ	311,105	48,224(15.50)	64,642(20.78)	85,414(27.46)
12 ウカヤリ	74,086	26,848(36.24)	15,288(20.64)	9,410(12.70)
13 ロレト	161,427	72,964(45.20)	14,066( 8.71)	28,990(17.96)
14 マドレ・デ・ディオス	16,176	3,884(24.01)	1,714(10.60)	3,368(20.82)
15 フニン	253,410	59,908(23.64)	106,521(42.04)	13,451( 5.31)
16 バスコ	63,026	11,866(18.83)	21,715(34.45)	5,223( 8.29)
(小計)	1,801,947	403,226(22.38)	388,101(21.54)	335,795(18.64)
<b>Cグループ</b>				
17 トウンベス	47,502	16,653(35.06)	5,410(11.39)	12,389(26.08)
18 ランバイエケ	335,503	89,026(26.54)	34,761(10.36)	126,760(37.78)
19 ラ・リベルタ	471,905	81,860(17.35)	39,278( 8.32)	243,778(51.66)
20 モケグア	53,570	9,582(17.89)	14,820(27.66)	15,121(28.23)
21 イカ	247,430	66,236(26.77)	55,757(22.53)	60,298(24.37)
22 アレキパ	396,195	128,882(32.53)	125,523(31.68)	54,581(13.78)
23 タクナ	79,940	16,704(20.90)	37,300(46.66)	13,215(16.53)
(小計)	1,632,045	409,213(25.07)	312,849(19.17)	526,142(32.23)
<b>Dグループ</b>				
24 リマ	2,993,303	1,058,181(35.35)	939,548(31.39)	399,758(13.36)
25 カヤオ特別郡	277,531	86,676(31.23)	104,964(37.82)	44,057(15.87)
(小計)	3,270,834	1,144,857(35.00)	1,044,512(31.93)	443,815(13.57)
26 海外	40,450	21,849(54.01)	5,255(12.99)	2,990( 7.39)
全国総計	7,866,858	2,171,957(27.61)	1,937,186(24.62)	1,507,905(19.17)

(出所) JNE, 1990年5月17日発表公式結果, および中央銀行調査部が, 1981年センサスに基づきまとめたべ

(注) (1) カッコ内は%。ただし四捨五入の関係で100.00%にならないものもある。

(2) 貧困地図は, 平均所得, 就学人口, 文盲率, 上水道設備, 平均寿命等を総合して算出したもので, Aグ

## 結果 (貧困度別)

I U	I S	その他	白票	無効票
19,194(19.96)	5,498( 5.72)	3,715( 3.86)	18,727(19.47)	18,145(18.87)
9,418( 9.90)	3,280( 3.45)	2,849( 3.00)	16,971(17.85)	17,524(18.43)
10,648( 9.09)	3,312( 2.83)	4,881( 4.17)	26,839(22.91)	21,550(18.39)
22,925( 7.47)	18,126( 5.90)	7,000( 2.28)	42,599(13.87)	40,398(13.16)
9,513( 7.52)	5,334( 4.21)	6,359( 5.02)	21,259(16.79)	16,643(13.15)
47,570(15.22)	10,436( 3.34)	14,623( 4.68)	39,271(12.56)	31,162( 9.97)
7,714(11.52)	1,671( 2.50)	923( 1.38)	9,439(14.10)	7,352(10.98)
126,982(11.32)	47,657( 4.25)	40,350( 3.60)	175,105(15.61)	152,774(13.62)
31,431( 9.07)	11,265( 3.25)	39,608(11.44)	39,404(11.38)	59,121(17.07)
14,357(10.92)	1,702( 1.29)	2,788( 2.12)	17,893(13.61)	17,292(13.16)
44,654(10.04)	31,557( 7.09)	3,458( 0.78)	38,422( 8.64)	36,139( 8.12)
22,287( 7.16)	11,973( 3.85)	3,998( 1.29)	42,119(13.54)	32,448(10.43)
4,149( 5.60)	1,587( 2.14)	3,578( 4.83)	7,344( 9.91)	5,882( 7.94)
14,964( 9.27)	3,783( 2.34)	2,388( 1.48)	10,855( 6.72)	13,417( 8.31)
3,853(23.82)	297( 1.84)	376( 2.32)	859( 5.31)	1,825(11.28)
10,472( 4.13)	5,406( 2.13)	7,210( 2.85)	29,638(11.70)	20,804( 8.21)
3,740( 5.93)	1,897( 3.01)	2,403( 3.81)	9,066(14.38)	7,116(11.29)
149,907( 8.32)	69,467( 3.86)	65,807( 3.65)	195,600(10.85)	194,044(10.77)
3,508( 7.38)	2,887( 6.08)	317( 0.67)	2,811( 5.92)	3,527( 7.42)
17,387( 5.18)	17,641( 5.26)	4,771( 1.42)	23,333( 6.95)	21,824( 6.50)
15,949( 3.38)	15,196( 3.22)	4,981( 1.06)	37,448( 7.94)	33,415( 7.08)
3,867( 7.22)	1,275( 2.38)	2,175( 4.06)	3,469( 6.48)	3,261( 6.09)
20,303( 8.21)	10,266( 4.15)	3,342( 1.35)	18,610( 7.52)	12,618( 5.10)
26,746( 6.75)	12,698( 3.20)	10,024( 2.53)	19,978( 5.04)	17,763( 4.48)
2,396( 3.00)	1,611( 2.02)	1,461( 1.83)	4,070( 5.09)	3,138( 3.98)
90,156( 5.52)	61,574( 3.77)	27,071( 1.66)	109,719( 6.72)	95,591( 5.86)
168,762( 5.64)	132,403( 4.42)	36,881( 1.23)	136,490( 4.56)	121,280( 4.05)
11,151( 4.02)	7,726( 2.78)	2,436( 0.88)	10,221( 3.68)	10,300( 3.71)
179,913( 5.50)	140,129( 4.28)	39,317( 1.20)	146,711( 4.49)	131,580( 4.02)
1,428( 3.53)	1,281( 3.17)	989( 2.44)	4,509(11.15)	2,149( 5.31)
548,386( 6.97)	320,108( 4.07)	173,534( 2.21)	631,644( 8.03)	576,138( 7.32)

ルーの貧困地図 *Mapa de pobreza del Perú 1981*, リマ, BCR, 1986年, の分類に従い筆者作成。

ルーが最も貧しく, Dグループがその逆となるが, 県の順位は必ずしも貧しさの順位ではない。

と国内という文脈の違いはあるものの、フジモリと同じく、彼らも生活状況の改善の志を抱いて故郷を離れた移住者かその子供であった。

1次選がフレデモ対反フレデモに分裂した経緯から、2次選ではアブラ党と左翼票がフジモリに流れるであろうことは明白であり、1次選が僅差で終わった段階ですでに2次選でのフジモリ勝利は決していたと言える<sup>(注7)</sup>。リョサが1次選直後、大改革を遂行するために必要なマンドートを国民が付託してくれなかったとして2次選辞退を心に決めながらも、カトリック教会を代表するバルガス・アルサモラ (Vargas Alzamora) = リマ大司教とフレデモ幹部の必死の説得で翻意した段階で、それは明らかだった。リョサは、それまで自分が率いてきた政治運動の責任と憲法上の義務を果たすべく、敗北覚悟で2次選に向かったのである<sup>(注8)</sup>。

2次選でリョサは、1次選での敗北に等しい結果を受けて、経済計画の中身には言及せず、ネクタイを外し、社会支援計画 (PAS) の普及を中心とする直接民衆を向いた戦術を展開した。リョサは、選挙結果に関わりなくフレデモは PAS を実施するとして、基礎物資の入ったフレデモ・マーク入りの袋をバリアーダス貧困区住民に分配した。しかし、住民たちは進んでそれを受け取りながら、フジモリ支持を逆に固める<sup>(注9)</sup>。また無党派の代表とみなされたベルモン = リマ市長、さらにクビリヤス (サッカー)、セシリア・タイ (バレーボール)、ツリオ・ロサ (コメディアン) といった混血や黒人で、各界の民衆のヒーロー的存在を動員してイメージの回復を図ろうとしたが、全く効果がなかった。また、プロテスタントとの対立のなかでカトリック教会が、民衆の信仰の拠り所であるセニョール・デ・ロス・ミラグロス (奇跡の主 [Señor de

los Milagros]) を異例ともいえる選挙戦の時期に特別引き出し、街路を練ったが、それは、カトリック教会が今日いかに政治的影響力を有していないかを証明するだけであり、全く効果がなかった。フレデモの攻勢に対する民衆の態度には、あたかもスペイン征服に伴って押しつけられたカトリック教世界に対し、適応を図りながらも自己の伝統的な宗教世界を守り続けたアンデス住民の、あとしたたかさを彷彿とさせるものがあつた。

2次選では、徹底した「フジモリ降ろし」が行なわれた。日系人ということに由来する人種的中傷、カトリック対プロテスタントの対立、持てるものと持たざるものとの対立が持ち込まれ、また、政策不在、アブラ党寄りの姿勢を種にフジモリは攻撃されたが、勝つことに徹したフジモリはそれらを冷静に受け止め、むしろ同情すら集めながら支持を確かなものとしてゆく。自己の代表を初めて手にした民衆たちの決意はすでに固いものがあつたと言うべきである。2次選で民衆たちがいかにことの重大さをはっきりと認識してフジモリに投票したかの一端は、白票の割合が8.03%から1.71%へと激減し、その大部分がフジモリに流れたことから窺える (第2, 3表)。

2次選でフジモリは、フレデモの地盤と見られたリマ首都圏で25万票の差をつけ、またサン・マルティン県などセルバ (selva) 地域諸県でもフレデモを上回り、全体で56.5% (450万票) を獲得して、リョサに圧勝したのであつた (第3表)。4チャンネルの政治番組エン・ペルソナ (En Persona) のアンカー、セサル・ヒルデブランド (César Hildebrandt) は、この結果を見て「民主主義は敗れた」と思わず叫ばざるをえなかったが、それは最も準備の整った、最も豪華な候補者を立てた勢力が、政策も不明瞭で中身もよく分からない候補

第3表 大統領選挙2次選結果(貧困度別)

県名	投票総数	カンビオ90	フレデモ	白票	無効票
<b>Aグループ</b>					
1 アプリマク	96,258	58,412(60.68)	13,223(13.74)	4,440(4.61)	20,183(20.97)
2 ワンカベリカ	88,806	57,489(64.74)	10,914(12.29)	4,422(4.98)	15,981(18.00)
3 アヤクチョ	132,973	84,494(63.54)	18,464(13.89)	5,369(4.04)	24,646(18.53)
4 カハマルカ	292,985	160,028(54.62)	76,062(25.96)	10,013(3.42)	46,882(16.00)
5 ワスコ	140,797	73,611(52.28)	41,275(29.32)	5,422(3.85)	20,489(14.55)
6 クスコ	313,452	206,591(65.91)	56,647(18.07)	12,268(3.91)	37,946(12.11)
7 アマソナス	68,383	37,120(54.28)	22,421(32.79)	1,661(2.43)	7,181(10.50)
小計	1,133,654	677,745(59.78)	239,006(21.08)	43,595(3.85)	173,308(15.29)
<b>Bグループ</b>					
8 プノ	350,349	251,192(71.70)	38,587(11.01)	9,546(2.72)	51,024(14.56)
9 サン・マルティン	140,684	71,383(50.74)	50,592(35.96)	4,208(2.99)	14,501(10.31)
10 ピウラ	448,412	253,785(56.60)	145,714(32.50)	8,637(1.93)	40,276(8.98)
11 アンカシュ	316,713	204,269(64.50)	61,299(19.35)	8,100(2.56)	43,045(13.59)
12 ウカヤリ	81,255	39,841(49.03)	34,325(42.24)	1,227(1.51)	5,862(7.21)
13 ロレト	162,231	66,253(40.84)	84,190(51.90)	1,842(1.14)	9,946(6.13)
14 マドレ・デ・ディオス	17,641	11,620(65.87)	4,755(26.95)	226(1.28)	1,040(5.90)
15 フニン	334,469	200,714(60.01)	97,258(29.08)	5,258(1.57)	31,239(9.34)
16 バスコ	72,401	42,881(59.23)	20,757(28.67)	3,724(5.14)	5,039(6.96)
小計	1,924,155	1,141,938(59.35)	537,477(27.93)	42,768(2.22)	201,972(10.50)
<b>Cグループ</b>					
17 トウンベス	49,540	27,180(54.86)	19,483(39.33)	595(1.20)	2,282(4.61)
18 ランバイエケ	332,763	197,256(59.28)	107,266(32.23)	4,917(1.48)	23,324(7.01)
19 ラ・リベルタ	465,907	313,348(67.26)	103,793(22.28)	8,240(1.77)	40,526(8.70)
20 モケグア	51,020	36,131(70.82)	11,750(23.03)	591(1.16)	2,548(4.99)
21 イカ	249,321	151,207(60.65)	83,540(33.51)	2,506(1.01)	12,068(4.84)
22 アレキパ	395,508	207,527(52.47)	162,468(41.08)	3,973(1.00)	21,540(5.45)
23 タクナ	81,434	54,477(66.90)	22,279(27.36)	720(0.88)	3,958(4.86)
小計	1,625,493	987,126(60.73)	510,579(31.41)	21,542(1.33)	106,246(6.54)
<b>Dグループ</b>					
24 リマ	3,007,594	1,549,452(51.52)	1,298,819(43.18)	25,927(0.86)	133,396(4.44)
25 カヤオ特別郡	272,051	151,309(55.62)	108,057(39.72)	1,980(0.73)	10,705(3.93)
小計	3,279,645	1,700,761(51.86)	1,406,876(42.90)	27,907(0.85)	144,101(4.39)
26 海外	37,031	14,993(40.49)	19,504(52.67)	609(1.64)	1,925(5.20)
全国総計	7,999,978	4,522,563(56.53)	2,713,442(33.92)	136,421(1.71)	627,552(7.84)

(出所) JNE, 1990年7月2日発表公式結果および第2表の分類に基づき筆者作成。

(注) かつこ内は%。ただし、四捨五入の関係で100.00%にならないものもある。

の前にかくも脆く崩れ去ってしまった現実に対する怒りにも似た叫びであった。

(注1) フレデモ	43.4 (%)
アプラ党	18.4
IS	12.9
IU	8.4
カンビオ90	4.8
その他	1.8
白票・無効票	10.3
	100.0

(注2) 選挙広報用パンフレット, *Cambio 90: el verdadero cambio*.

(注3) アレキパ県を始め南部のエバンヘリスタ (Evangelista) 勢力をとりまとめたのが、アレキパ選出下院議員、日系2世のギジェルモ・ヨシカワ (Guillermo Yoshikawa) 議員であった。

(注4) 前掲パンフレット, *Cambio 90*……は、30億の国際支援 (贈与) 獲得をキャッチフレーズとしており、有権者がこれを日本からの援助と結びつけたことは十分考えられる。

(注5) *Si*, 第161号, 1991年3月26日～4月2日。

(注6) フジモリの急激な支持の伸びについて、アルパロの回想によれば、フレデモ陣営でもその動きを正確に掴めないまま投票日に突入していった観がある。Vargas Llosa, Alvaro, 前掲書。

(注7) アプラ党は、1990年5月24日全国執行委員会声明で、「右派には投票しない」と決定し、IUは、5月27日全国執行委員会声明で「バルガス・リョサには投票しない。2次選での唯一の選択はカンビオ90である」とその立場を明らかにした。また無効票を呼びかけたのは、MRTA とそれに通ずる人民民主連合 (Unión Democrático Popular: UPD) であった。

(注8) Vargas Llosa, Alvaro, 前掲書, 157～160ページ。

(注9) この配給に対してトバル＝サパタが引用しているチンチャ (Chincha) 地方の農民の「あんたたちのくれる食料は食べるし、ポロシャツも着るが、自分はチニートに投票するよ」(Como su comida, me pongo su polito, pero marco por el chinito) という発言に象徴される。Tovar, Teresa; Antonio Zapata, "La ciudad mestiza: vecinos y pobladores en el 90," Balbi ほか, 前掲書所収, 113ページ。

## 結びにかえて

### ——政党政治の危機——

以上見たように、1990年の大統領選挙は素人政治家フジモリが勝利した。バルガス・リョサとともに2次選は、無党派の政治家でない人物どうしの争いとなったが、それはとりもなおさず、伝統的な職業政治家への警鐘、ひいては政党政治そのものの危機すら意味するものであった。各政党は、現実の社会的変化に合わせてそれぞれのイデオロギーを刷新しながら、多数派となっている民衆層との関係をいかに構築するかという困難な課題に直面している。

またフジモリ政権は、1990年7月28日発足後、与党カンビオ90が国会内で第3勢力であり、いずれの政党とも連立をしないとの立場を貫いていることから、現行憲法下で初めての少数派政権となっている (第4表)。フジモリ大統領は、これまでのところ、元フレデモ系3党、アプラ党、左翼の

第4表 国会勢力分布 (1990年8月現在)

(単位: 議席数)

	上院	下院
自由運動 <sup>1)</sup>	8	11
PPC <sup>1)</sup>	5	25
AP <sup>1)</sup>	7	26
アプラ党	16	53
カンビオ90	14	32
IU	6	16
IS	3	4
FIM <sup>2)</sup>	—	7
その他	1	6
	60	180

(出所) JNE の公式結果 (上院 1990年5月23日, 下院同年6月12日発表) により筆者作成。

(注) 1) 自由運動, PPC, AP は元フレデモ。

2) FIM(独立浄化戦線 [Frente Independiente Moralizador]) は上院には立候補せず。

均衡のうえに立って、争点ごとに多数派を形成して事に当たるといふ困難な政治運営を余儀なくされている。フジモリ大統領は、内閣にも与党始め既成政治家を用いず、無党派のテクノクラートで固め、党派的な対立からは可能なかぎり独立した立場を築いている。政党政治の危機、さらには未曾有の経済危機を前にして各野党がフジモリ政権に対し慎重な対応を迫られていることもあり、国会運営における経験不足など否めない面があるものの、これまでのところ、まずまずの成功を収めてきたと言える。しかしフジモリは、政権を誕生せしめた民衆の支持を組織化して体制の支柱にしようとはしていない。漠然とした世論の支持が体制を支える大きな柱となっており、厳しい環境下でいかに民衆層の期待を現実政治のうえに実現し、政治と社会との距離を埋めてゆけるかに政権の成否がかかっていると言えよう。

他方、これまで多数派政権の下で、国会の機能が著しく弱められてきたが、少数与党政権誕生を踏まえて、国会における各党間の交渉・協議による妥協と調整の政治を余儀なくされている。これは短期的には不安定さを呈するが、長期的に見ればペルーの民主政治の発展にとってプラスの効果を及ぼすものと見てよいだろう。

もとより、これが行政府対立法府の厳しい対立を招き、1960年代のベラウンデ政権のように政策の膠着状況をむかえ、政治的安定度を極度に失ってゆくことになるか否かについて現時点で判断を下すことは、時期尚早である。

(1991年3月20日脱稿)

(アジア経済研究所総合研究部)

〔付記〕 本稿は、中南米総合研究事業1990年度の研究会「90年代ラテンアメリカの政治変動と構造問題」の成果の一部である。